



# 医局だより

- 町田 洋一 亀田総合病院 放射線科部長・画像診断センター長 / 亀田京橋クリニック診療部部長（放射線科担当）兼務
- 黒住 昌史 亀田総合病院 乳腺科乳腺病理部長・臨床病理科部長（乳腺病理担当）兼務
- 大山 優 亀田総合病院 腫瘍内科部長
- 福間 英祐 亀田総合病院 乳腺科主任部長



## 亀田総合病院乳腺センターの紹介 — デジタル化、多様化、グローバル化 —

私たちの亀田総合病院・乳腺センターは、千葉県房総半島南部の鴨川市にあります。東京から車で2時間の人口35,000人弱の市で、太平洋に面し東京オリンピックのサーフィン会場にも立候補したリゾート地です。また、地魚の美味しい隠れたグルメタウンです。田舎ながら当院はベッド数900、医師数400人の総合病院です。先端医療に取り組むことは病院のミッションで、例えば1995年から電子カルテを導入し、画像、そし

て病理標本のデジタル化、地域での電子カルテ共有と進んできました。

一方、乳腺では、1990年代に初代部長の深見敦夫先生が乳腺外科を立ち上げ、三品佳也先生、福間と引き継いできました。2000年代は世界の乳腺診療が大きく変わり始め、乳腺に関わる多様なサービスをそろえ対応することが求められはじめた時期でした。2002年に乳腺外科は一般外科から独立し、日本でおそらくはじめての乳腺センターとしてスタートしました。多様なサービスには、乳がん検診、乳腺画像診断、乳腺病理、乳腺外科手術、オンコプラステックサー

## 医局だより

ジェリー (OPBS)、乳房再建、リンパ浮腫治療、薬物療法、放射線治療、遺伝科、癌生殖、リハを含めたケアなどがあり、多くの人材を必要とします。亀田乳腺の患者は海外、日本全国からも来られるため、鴨川だけではなく東京京橋や千葉幕張の附属クリニックや東京の連携クリニックでの診療が必要で、乳腺の医師はフットワークが軽く週2回の東京往復をこなしています。

多様な人材の確保、診療情報の共有には亀田が進めてきた診療のデジタル化が役立っています。たとえば東京小岩の患者様が受診したとします。京橋で乳腺画像診断チームが生検適応を決め、鴨川で町田がMRガイド下生検を行い、京橋で原田大先生が病理診断をする。遺伝相談は京橋か鴨川で行い、妊孕性温存は幕張で行う。鴨川で手術をし、手術検体の病理診断は京橋か前橋で黒住が行う。週1回行う鴨川が多職種 Cancer Board で適応を決め、京橋で化学療法を行う。判断に迷う症例は、腫瘍内科の大山の友人である、テキサス大学サンアントニオの V.Kaklamani 先生が参加する月1回のCBで検討する。デジタル化により、多様なスタッフが病理画像を含めすべての診療情報を共有することができるため、同じ場所にいる必要はなく、最速で最適な治療の提供ができ、医師もウェブ会議に違和感がありません。



亀田乳腺のもう一つの特徴として、治療の多様化と多様な教育があげられます。例えば局所療法では、乳腺センターに形成外科の浅野裕子先生、リンパ浮腫治療の林明辰先生が属し、乳腺専攻医は形成外科手技を含めたOPBSを学ぶことができます。内視鏡手術、凍結療法、乳房再建、脂肪注入などは当センターの専攻医にとり習得すべき手技です。患者の状態や集学的治療を考慮し、多くから最適の局所療法を選択する考え方を学びます。また、専攻医終了後の病理・画像・腫瘍内科など他科ローテは多様な知識を学ぶために必要と考えています。

当センター最後の特徴がグローバル化です。亀田自体も以前の副院長は米国人で、米国留学帰りの医師が多数在籍しています。中国の医学部卒業の医師、看護師も在籍し、海外の臨床修練生も臨床の場に多く参加しています。当センターも以前より海外交流が盛んで、コロナ禍直前の2019年には海外からの見学者を20組以上受け入れ、30件以上の海外講演をこなしていました。OPBS手技も海外交流の場で学んできました。鴨川は田舎ですが、スタッフに海外アレルギーはありません。オンライン診療など海外での動きは速く、コロナ禍が明けた世界の乳腺診療がどう変わっているか楽しみです。今は、遅れないようウェブ交流をかかさず、また広くアンテナを張る毎日です。